

「既存建築物の耐震診断・耐震補強設計マニュアル 2018年版」正誤表

平成 31 年 2 月 15 日に発行しました「既存建築物の耐震診断・耐震補強設計マニュアル 2018 年版」に下記の正誤がありましたので掲載します。

(アンダーラインが修正箇所)

2025. 5. 26 訂正

上巻	頁	位置	追記
	p. 97	上 L2	…(2.6-1)式より求める。 <u>(2.6-1)の上 2 式がいずれも成り立つ場合には、大きい方の値を OBD とすることが出来る。</u> その時…
			誤
	p. 153	下 L9	$Q_i = \left(\sum_{j=i}^n \beta_j \cdot u_j \cdot W_j \right) \cdot S_a = W \cdot \beta \cdot \left\{ \frac{1}{2} n(n+1) - \frac{1}{2} i(n-1) \right\} \cdot S_a$
			正
			$Q_i = \left(\sum_{j=i}^n \beta_j \cdot u_j \cdot W_j \right) \cdot S_a = W \cdot \beta \cdot \left\{ \frac{1}{2} n(n+1) - \frac{1}{2} i(i-1) \right\} \cdot S_a$
			誤
	p. 203	上 L7	<p>iii. <u>そで壁付き柱のせん断強度 Q_{su1} および Q_{su2} は、シアスパン比 $(M/(Q \cdot d_e))$ の下限値を下記のよう</u><u>に設定し (解3.2-3) 式により算定してよい。</u></p> $Q_{su1} (Q_{su2}) = \left\{ \frac{0.053 p_{te}^{0.23} (\sigma_{BD} + 18)}{M/(Q \cdot d_e) + 0.12} + 0.85 \sqrt{p_{we} \cdot \sigma_{wy} + 0.1 \sigma_{0e}} \right\} b_e \cdot j_e \quad \text{解(3.2-3)}$ <p><u>ここで、</u></p> <p><u>p_{te}, σ_{BD}, p_{we}, σ_{0e}, b_e, j_e : 解(3.2-3)式で Q_{su1} を算出する場合は建防協RC基準の(付3.8)式の記号の定義により、また、同じく解(3.2-3)式で Q_{su2} を算出する場合の各記号の定義は第9章別表9.4の解説付表2 に記された記号の定義による。</u></p> <p><u>$(M/(Q \cdot d_e))$: そで壁付き柱のシアスパン比で Q_{su1} 算定に際しては0.6未満のときは0.6、2.0を超えるときは2.0とし、Q_{su2} 算定に際しては0.6未満のときは0.6、3.0を超えるときは3.0とする。</u></p> <p><u>d_e : そで壁付き柱の有効せい(mm)</u></p>
			正
			<p>iii. <u>そで壁付き柱のせん断強度 Q_{su1}、Q_{su2} および Q_{su3} は、建防協RC基準(付3.7)式～(付3.13)式による。第9章p.299～300および別表9.7に関係式をまとめたので、参照すると良い。</u></p>